

近年のプラグマティズムにおける経験概念の位置

—教育の視点から—

The Position of the Concept of Experience in Pragmatism

From an Educational Perspective

山 上 裕 子*

Yuko Yamakami

Over the last few years, pragmatism has been actively discussed. The concept of experience has been the center of classical American pragmatism's philosophical vision, but some arguments deny its importance. This study aims to show the position of experience in its discussions.

In this paper, first, I present an overview of works on the history of pragmatics thought. Second, I organize how pragmatists consider the position of experience. Third, I trace Richard Bernstein's claim about the importance of experience. Finally, I consider an educational perspective on pragmatism.

はじめに

本稿は、近年のプラグマティズムの議論において、経験がどのように位置づけられているか、整理することをとおして、教育における経験の意味を改めて考える観点を示すことを目的としたものである。

近年のプラグマティズムの動向の一つに、プラグマティズムを思想史から問い直す動きがみられる。例えば、ウェスト (Cornel West) は、認識論中心の哲学的課題を回避したとし、その原型をエマソン (Ralph Waldo Emerson) に求めプラグマティズムを辿る。またメナンド (Louis Menand) は、プラグマティズムを南北戦争が与えた不信感をもたらしたものとし、「メタフィジカル・クラブ」を描く。一方、ミサク (Cheryl Misak) は、真理の追求という哲学的課題を軸にプラグマティズムを記述する。更に、伊藤邦武は真理の「追求」スタイルを特徴とし、プラグマティズムの動向に注目する。

教育の立場に立つならば、イギリス経験論とは異なる意味の経験が、アメリカプラグマティズムにおいてなされたことを忘れてはなるまい。成長そのものを教育の目的としたデューイ (John Dewey) の経験を重視した教育論は、学びの方法やカリキュラムなど教育実践現場にお

* 幼児教育学科

いて、多大な資源を現在も与え続けている。しかしながら、人の成長を語る時、経験抜きで語ることが可能であるかはわからないが、経験を重視しないプラグマティズムの動きがある。例えばローティ (Richard Rorty) があげられる。その一方で、古典的プラグマティズムの経験論を今一度見直す動きもある。例えばジェイ (Martin Jay)、バーンシュタイン (Richard Bernstein) らである。

周知のように、経験ということばは、哲学上においても、教育学上においても大変扱いにくい概念の一つである。プラグマティズムにおける教育論は、デューイにおいて展開されたが、彼のいう経験は一樣でなく明確ではない。これまで、実験の意味であること、反省的思考の過程を指すこと、エマソンの超越を指摘するもの、習慣との関連でみるものなど、経験の位相について数多くの解釈がなされてきた。それは、彼が一つのことばに多様で複雑な意味をもたせていることも理由の一つだが、デューイが『経験と自然』 (*Experience and Nature*, 1925) を後に『文化と自然』にした方がよかったと友人ベントリー (Arthur Bentley) に伝えているように、彼の論稿は自身が追求し続けていく記述スタイルをとっていたことも、理由の一つとしてあげることには異論はなかろう。なるほど「絶対主義から実験主義へ」の転向は、デューイにとって40年以上にわたる自らの「荒野の彷徨い」を意味していたのであった¹。

本稿の構成は、以下のとおりである。一、近年刊行されているプラグマティズムの思想史について何を軸に描いているのか、いくつかの著書を概観する。二、論理実証主義の波を受けたプラグマティストたちによる経験の扱い方を整理する。三、古典的プラグマティズムの経験概念の重要性について、バーンシュタインの主張を示す。最後に、教育の立場から経験について改めて考える観点を示すこととする。なお、各章において、プラグマティズムの教育論を展開したデューイのいう経験について触れることになる。

一、プラグマティズムの描き方

ウェストは著書『哲学を回避するアメリカ人』 (*The American Evasion of Philosophy*, 1989) で、プラグマティズムが再び脚光を浴びていることを次のようにいう。「プラグマティズムは、認識論中心の哲学を忌避し、人間の力を強調し、宗教および／ないし倫理における理想から見て旧態たる社会的ヒエラルキーを変えようということを中心テーマとしているおかげで、今日的であり、かつ魅力をそなえている」²。そして米国人の目に入らなくなった過去に埋もれている知的政治的遺産であるエマソンにプラグマティズムの源流をみる。ウェストによるとエマソンが同時代人と異なるのは、たとえ習慣や法律や伝統に逆らうことになろうとも、個人の良心に従う自己信頼 (Self-Reliance) を貫こうとした点にある³。もちろん、人は色眼鏡をとおしてものを間接的にしかみることができない悲しみを負い、透明な眼球でさえ地平の内の一つに過

ぎない⁴、自己信頼という理想は、哲学への挑発なのだ。エマソンの企ては、哲学が確実性を探究し基礎づけを求めることを独創的なやり方で拒絶する。この拒絶こそ米国プラグマティストたちの感性や心情を育て上げた、というのである⁵。したがってウェストの主張は、プラグマティズムそのものへの回帰というよりはむしろ、エマソンへの回帰を意味することになる⁶。

ウェストは、パース (Charles S. Peirce) やジェームズ (William James) 以上にデューイに多くの紙幅を割き、デューイをプラグマティズムが「知的成熟や歴史的視野や政治的関与」を備えるようになった功績者と位置づける⁷。そしてデューイが、エマソンのいう経験について関係性、相互作用の点でイギリス経験論における経験概念を乗り越えていると指摘したことを取りあげ、エマソンとデューイとの関連を近代認識論の回避にみる⁸。ウェストはデューイを、近代哲学者たちによって展開されてきた経験概念を問い直すことで、より深く豊かな経験概念を示したと評価している⁹。

次に、メナンドの著書『メタフィジカル・クラブ』 (*The Metaphysical Club*, 2001) をみてみよう。メナンドは、南北戦争が若者たちに与えた傷跡が多大な影を落とし、そこからプラグマティズムが生まれていく過程を、ホウムズ (Oliver W. Holmes, Jr.) を中心にした物語として展開する。ホウムズの南北戦争で刻みこまれた傷を癒したのは、エマソンだった。それは、自身が心底真実と思えるならばそれは真実なのだ、と信じたことだった。メナンドは、ホウムズの著書『コモンロー』 (*Common Law*) をとおして、以下のように経験に触れる。ホウムズにとって「法の生命は論理にではなく、経験に宿る」ものである。経験とは、人体とその環境の相互作用から生じるすべて、信念、感情、習慣、価値観、指針、偏見などの時代の切実な必要を指す名前、またの名は文化である。それは命題に置き換えることができないこと、集団的で合意に基づくものであること、すなわち、一般人の経験をいう¹⁰。

さてメナンドによると、デューイは精神と世界との関係ではなく、手と世界との関係を問題にした。観念や信念も手と同様に、問題に取り組む道具であり、それは人間の問題を扱うことにおいて哲学が生まれ変わる、というデューイの主張へと繋がるものである¹¹。エピローグにおいて、デューイの『経験と自然』をホウムズが幾度となく読む場面を登場させる。なるほど『経験と自然』の10章でデューイには珍しいことだが、長文にわたってホウムズの『自然法』 (*Natural Law*) を引用している¹²。メナンドはホウムズと古典的プラグマティストとの共通点を、人生は実験であること、決して確実性にたどり着くことはないこと、寛容であることをあげ、共有していない点に楽天性をあげる。実験的精神は最終的に私たちをどんな場合にも適正な道筋に導くことになるとは信じていないのであり、民主主義とは実験であり、実験の本性としてときに躓くこともある¹³。こうしてメナンドはプラグマティズムを、南北戦争を端緒に時代を引き受けた若者たちの実験的な精神を描き、その精神を受け継ぐ者として、デューイを位置づける。

ところで、ミサックは著書『アメリカのプラグマティスト』(The American Pragmatists, 2015)で、メナンドの『メタフィジカル・クラブ』のハウムズの取りあげ方を次のように批判する。ハウムズはメタフィジカル・クラブのメンバーと実際議論をしていないし、『コモンロー』はイギリス法に基づいたもので、彼のプラグマティズムは法廷の場における実践にある¹⁴。メナンドの描くプラグマティズムは、ローティが真理や確実性を議論するのではなくコミュニティの同意を議論しているのと同様に、哲学的に誤った導きをした。南北戦争のトラウマから始まる物語は、プラグマティズムのよき理解には至らない。なぜならば南北戦争は、初期のプラグマティストたちの哲学的論考に、動機として現れてはいないからだ。ミサックの主張は、真理の理論はプラグマティズムにおいて重大な問題だから、それこそ議論をすべきという点にあり、ライト(Chauncey Wright)やパースをアメリカの分析哲学開拓者として位置づけることにある¹⁵。彼女はパースを評価し、ジェイムズを個別性や主観性が強いことなどからプラグマティズムの周縁に追いやる¹⁶。

さて、デューイについてである。彼女はいう。デューイは高名だが、彼自身はプラグマティズムを促進させることを意図していなかった。新しい生物学をプラグマティズムにもたらしたが、それは現在の分析哲学を引きつけるものではない。デューイにとって認識論に関する最も重要なミッションは、あらゆる哲学の分野に科学的思考を推進させることだった¹⁷。デューイのいう経験は多様な見解が混ざり複雑であり、経験について、環境との有機的な関係で考える生物学的展開は、イギリス経験論と異なる点である。

このように、ミサックはデューイの経験論について一定の理解を示すが、かつてパースがデューイを批判したことを取りあげ、知識を自然化することについては否定的である¹⁸。デューイはパースと同様に探究の理論を追求しているが、パースが真理や方法を未来の(探究にも耐え得るような)規準に置いているのに対して、デューイは探究の結果という過去に置く¹⁹。経験から要素を抽象化することによってのみ独立した対象に接近できるとする抽象化への言及が、デューイにはない点が不満なのである。したがってアメリカの分析哲学という主軸からデューイは外れることになるが、探究の理論があるゆえに、ジェイムズほど遠くに位置づけてはいない²⁰。

伊藤邦武は『プラグマティズム入門』で、プラグマティズムの特徴を真理の追求スタイルとし、それを軸にしたプラグマティストの紹介をする。真理を軸とする点でミサックと軌道を共有し、古典的プラグマティストらを次のように位置づける。パースとジェイムズは互いに親しいが、それは重心の異なる二つの思想で、二つの焦点をもった複眼的で楕円的な思想である。二人の思想を巧みに組み合わせて一つのまとまりのある思想へと仕上げた第三の思想家は、デューイである²¹。

以上みてきたように、数冊に過ぎないがプラグマティズムの描き方は多様である。言語分析

では掬えない経験の意味の多様性(生活上も含めた)に着目する解釈学的な見方からすると、エマソンへの回帰や南北戦争という社会状況を背景とした描き方は親しみのもてるものだが、プラグマティズムをアメリカ分析哲学の開拓とし、ジェイムズやデューイを周縁に位置づけることはなじみの薄い見方である。では、改めて経験をどうみたらよいのだろうか。論理実証主義の波を受けたプラグマティストたちが、経験の扱い方に苦慮している様子的一端を、次にみてみよう。

二、経験を重視しないプラグマティズム

バーンシュタインは、友人ローティを、経験を軽視したと批判する。ローティは編著『言語論的転回』(*The Linguistic Turn*)で、「言語論的哲学」は、「哲学の問題は言語を改良するか、あるいは、現在使用している言語の理解を深めることによって解決されるという考えにある」、「この考えは歴史的にみて最も重要な哲学的発見である」²²、というように、哲学における過去のあらゆる革命は失敗だったとし、言語論的転回を哲学の運命と信じている。しかし、プラグマティズムにおける経験概念の重要性を軽視した責任を生んだ²³。

そしてローティによるデューイ批判を取りあげる。ローティはデューイを、人間の苦悩、喜びなどに精神的なものと科学的なものを包括する経験を記述しようとするが、科学的思考の出発点は歴史的時代に拘束されているのだから、経験の包括的統合を経験的に説明できないし、仮に時代の拘束から解放されて単純な経験から複合的な経験が生じてくるという考えは、平明な歴史的方法を追及することになる、つまり、心理学的問題と概念的問題を混同しており、経験包括的統合の試みは失敗であったという²⁴。このようなローティのデューイ批判をとおしてバーンシュタインはローティを、経験の形而上学をあげるとともに、経験を参照するものとしてみたことを強く批判する。そして次のように畳みかける。ローティは、ジェイムズの多くの経験に関する言及についても見下した。ローティのプラグマティズムは経験のないプラグマティズムなのだ。率直に言って私は、プラグマティズムから経験を排除することは、プラグマティズムの内蔵を除くことであり、実質のない形だけを残す、と強くいう人々に同意する²⁵。

バーンシュタインの主張は次のとおりである。古典的プラグマティストらによる経験の主張は、もつれた哲学的問題の解決を支える企みのようなものである。しかしそれは、経験を洞察しないでよい、ということではない。理解すべきは、なぜ経験が古典的プラグマティズムの中心的役割を担うのか、である。バーンシュタインは、ローティが古典的プラグマティズムにおける経験の深い意味を理解しそこなった、と強く批判するのだ。

周知のように1930年代、アメリカプラグマティズムは論理実証主義の波を受け、その後のアメリカの哲学者たちに影響を与えることになる。論理実証主義において、経験は真理や知識

の理論の実証的位置づけにあるが、そこに疑義を呈することでプラグマティズムの新しい動き、ネオ・プラグマティズムが生じた。この論理実証主義における経験主義的基礎づけに対する論理実証主義内からの批判は、経験を議論するための論点を明確にしてくれる。

ヨーロッパで論理実証主義を学んできたクワイン (Willard V. Quine) は、論理実証主義における経験について、二つのドグマがあることを暴く。一つは、事実問題とは独立に意味に基づく真理 (分析的真理) と、事実に基づく真理 (総合的真理) の間に、ある根本的な分裂がある、という信念である。二つは、有意味な言明は直接的経験を支持する明示からの論理的構成物と同値である。クワインは、どちらも根拠のないことを論証する。有意味な言明は直接的経験において支持されるという事実は、個別的にはありえない、なぜならば、特定の経験による言明は、場全体を示すものではなく、われわれは信念をネットワークの全体で受け取っているからだ。したがって、分析的な言明もそれが真であるかどうかは、一部についていえるだけであり、分析的、総合的の明確な区別はできない²⁶。このように経験の場全体 (the total field) に言及することで、いかなる言明においてもその意味の検証として経験を位置づけることに、異議を唱えるのである。

セラーズ (Wilfrid Sellars) は、「所与の神話」 (myth of the given) を批判する。クワインにも同様の考えはあったが、より鮮明にする。特に、直接経験の直接的、内在的な「感覚与件」 (sense data) を取りあげる。セラーズによると、感覚与件説にしたがえば、経験的知識は事実についての非推論的な知識という基礎に依拠していることになるのだが、それで知識を構成することはありえない²⁷。また、各事実は非推論的に知られるだけでなく、他の知識を一切前提にせず、究極の最終審であるという考えについて、ある出来事をまたは状態を知っているという時、われわれは、その出来事または状態の経験的記述を与えているのではない。人が述べている事柄を正当化し、正当化できるという「理由の空間」 (the logical space of reasons) の中に身を置き、そこでの因果関係等で、正当化がなされるのだ。このように批判するのだが、だからといって経験的知識には基礎が何もないというわけではない。自己を訂正していく企てという点において合理的な基礎をもつのである²⁸。

このようにセラーズは、直接的に与えられるデータに、疑問の余地を与えないことを批判し、経験的知識を、自己を訂正していく企ての合理的基礎とする。そして直接的経験を、日常言語の論理に光を投げかける最小の特徴だけを帰属させる身分に置くのである。このセラーズの「所与の神話」を受けて、マクダウェル (John McDowell) は、最小限の経験主義 (a minimal empiricism) を主張する。それは、思考は経験の法廷に応じる責任があるが、如何にしてそれが可能なのか、を問うことである²⁹。こうして論理実証主義の経験に対する議論がなされていくのだが、その議論は検証としての経験という図式内でのことになる。

さて、ローティも上述にみられるプラグマティストらの見解を吸収している。周知のように、

彼は、哲学的基礎に基づいて「基礎づける」という考えから解放するところにジェイムズとデューイを評価し、会話による新たな哲学の展開を主張した³⁰。バーンシュタインも同時代に身を置き互いに議論をするが、クワインやローティと異なるのは、経験を検証の場に位置づけて議論する論理実証主義の立ち位置とは異なる点である。彼は、哲学における「イズム」への慎重な対応を自覚する。「イズム」は哲学の流行を示し、他と異なる哲学的立場にレッテルを貼ることを可能にするが、「イズム」を何か本質的な特別なものとして考える危険性がある³¹。そこで「理解すべきは、なぜ経験が古典的プラグマティズムの中心的役割を担うのか」という先に示した問いとなるのだ。それでは、バーンシュタインは古典的プラグマティストたちの経験をどう捉え、位置づけようというのであろうか。

三、再び経験へーそしてデューイ

バーンシュタインは、経験と言語論的転回という二分法に陥ることなく、パース、ジェイムズ、デューイの経験を説明し、ミード (George H. Mead) の貢献を示すこと、そして言語論的転回と経験を統合することができる豊かなプラグマティズムの提案を目指す³²。

まず彼は、パース哲学の中心となるカテゴリー論、すなわち第一性、第二性、第三性を、パースの経験を理解するための発見装置とみる。パースによると、カテゴリーはわれわれが気づくあらゆる現象の諸要素である。もちろん諸要素は、分離されたものではなく、ともにあるという関係性をもつ。第一性は、あらゆる現象の質的な側面であるが、それは、情動や時間の流れによる変化、分析や比較などの作用を含まない可能性を有した性質それ自体のことである。第二性は、第一性のいわば点である性質に対して他の存在物と力動的に反応し合っている経験的世界という現実にもみるもので、驚きの衝撃などの瞬間的直接的意識における意志に関わるものである。そして、第三性は、第一性と第二性の中間に位置し、第二性の個別的事実に対して手段、連続性、過程、秩序、法則などの一般的なものをいう。³³ バーンシュタインはこれらのカテゴリーの分類は相互に作用し合い、パースが現象をネットワークで捉えていることを強調し、現実と接触することを失わず、あらゆる実践探究に開かれていることを指摘し、そこにパースの経験概念を確認する。それは言語論的転回が、言語的理想主義へとスライドさせないための着目でもある³⁴。

ジェイムズの経験概念については、4つの側面から確認している³⁵。(1) 伝統的経験主義とは異なり、経験は個々ばらばらの原子が現れたり結びついたりするのではなく、経験は流れにおいて説明される。われわれは、活動を傾向、障害、意志、時間や空間、重さや色などその状況が含んでいる性格を感じるように³⁶、経験は知ること以上のものである。(2) 純粹経験には心と物、身体と魂などの二元性はありはせず³⁷、知ることにおいて素材として相互に関連し合

う。それは意識ということばが存在を表すという考えを否定することになる。しかしジェイムズ自身の説明不足は否めず、未だ純粹経験についての解釈がなされている。(3) 言語論的転回後において、ジェイムズが多大な関心を寄せた宗教的経験の議論が回避されている。彼のいう宗教は「個々の人間が孤独の状態にあって、いかなるものであれ心的な存在と考えられるものと自分が関係していることを悟る場合にだけ生じる感情、行為、経験」³⁸をいう。ジェイムズの論考は多々あるがそれはドグマ的なものでなく、開かれたものである。彼の記述を超えた広がりをもつと考えられ、学ぶべきものがある。(4) ジェイムズの記述スタイルについて、評価が分かれるが、ジェイムズは日々の経験がもたらす生きた背景のニュアンスを書いたのだ。このように、バーンシュタインはジェイムズが記述した経験について、再考の余地があることを示し、人の生との関連に経験を置いていることに着目している。

次にデューイである。バーンシュタインは、デューイのいう経験について、ヘーゲル (Georg W. Hegel) からの影響が「永遠の預金」(permanent deposit) としてあり続けたこと、そしてダーウィン (Charles R. Darwin) の進化論において、経験が理解されたことを指摘する。この指摘を基に、以下の点を確認する³⁹。デューイの経験概念の芽生えは、協応作用 (co-ordination) に遡ることができる⁴⁰。それは空間的なもので、主観的または客観的、精神的または身体的なものでない。パースやジェイムズと同様に古典的経験主義を批判し、デューイはわれわれが通常話すやり方で経験を回復したかったのだ。そして経験は、出来事であり、多くの要因が巻き込まれ、状況 (situation) で表現できるような質を含み、美によって完璧なものとなる。このように、バーンシュタインはデューイの豊穡な経験概念について、ヘーゲルやダーウィンの影響を受けつつ独自の展開をした、と述べている。

バーンシュタインは、ハーバマス (Jurgen Habermas) による言語のコミュニカティブな機能というシフト転換の鍵をミードにみる。ミードは社会的現象として、言語の発生について詳細を語った⁴¹。ミードによる言語のコミュニカティブな機能には課題があるが、ハーバマスや他の研究者は、ミードの洞察を更に発展させた (例えば、身ぶりによる会話など) と、ミードの貢献に触れる。そして言語か経験かという不毛な議論は止め、人間の生活世界との接続を失わない「言語論的プラグマティズム」を提案する⁴²。このようにバーンシュタインは、哲学の中心として経験を再考し、古典的プラグマティズムの経験と言語の関係について着目することで、未だ学ぶべきことがあるというのだ。つまり、再考すべきプラグマティズムにおける経験は、人間の実際的生活世界と理論との接続を担うところのものである。

さて、デューイは「哲学は教育の一般理論である」といった⁴³。この『民主主義と教育』(Democracy and Education) にある有名な文言にみられるように、彼は具体的な経験を検証の場にしていない。人が知ることにおいて傍観者であることを拒否し、経験の場に身を置くことによって経験の過程における成長、すなわち教育を語る。知ることは身と外の関係にある認識論

的思考法とは異なるのだ。経験にはさまざまな要素が絡み合い、過去の経験は、新たな状況で探究活動をとおしてより以上の経験になる可能性をもつ。それは、真偽の検証のための道具ではなく、自身の内からのより以上の成長を議論する実験的な学びの方法概念である⁴⁴。直接経験に正当化の責務を負わず、論理実証主義における経験とは異なる経験を議論にすることは、デューイにおいて個人のより豊かな成長を可能にする経験を語る教育を論じる地平を拓いたと考えられる。

バーンシュタインにしたがうならば、ローティは確かにデューイを評価したが、論理実証主義を土俵とした限りにおいて、デューイのいう経験の豊かさを知る機会を失った、ということになるのである。

おわりに

経験をどこに位置づけるのか。論理実証主義において経験は、実証的役割にあった。クワインやセラーズらは、知識をネットワークと捉え、論理実証主義内にすまう所与性を批判した。しかしながら、議論は検証としての経験という位置づけを抜け出るものではなかった。それに対してバーンシュタインは、イズムを拒否し、古典的プラグマティズムのいう経験概念の再考に向かう。パースは哲学を、日常的経験から合理的実証的方法を使用して事実を探究し、そこに真理を発見する科学であるとした⁴⁵。そしてジェイムズが哲学の構築に際して、絶対論を拒否し、経験における感じを確かなものとして示したように⁴⁶、古典的プラグマティストらは、人の生における真理を探究する場に、経験を置くのである。それは会話という「拘束以外には探究に課せられている拘束は一切存在しない」⁴⁷と切り切るローティにみられるような言語と経験に一線を設けることではなく、多様で、複雑で動的な生活上のネットワークを意味する経験における探究をわれわれに求めるものであった。古典的プラグマティストの内、教育論を展開したデューイにおいて人の生における真理の探究は、自身の内からのより以上の成長を議論する実験的な学びという方法概念として示された。では、教育において真理の探究を要求する経験は、どのようなものなのか。どのような学びを子どもたちに求めることになるのか。古典的プラグマティズムのいう経験の再考は、経験が教育の問題圏にあることを改めて再確認することを要求するのである。

註

- 1 J. Dewey, "From Absolutism to Experimentalism", *The Later Works vol.5*, Southern Illinois University Press, 1984, p.160.
- 2 C. West, *The American Evasion of Philosophy*, The University of Wisconsin Press, 1989, p.4. (村山淳彦・堀智弘・権田健二 訳『哲学を回避するアメリカ知識人—プラグマティズムの系譜』未来社、2014年、12頁。)
- 3 *Ibid.*, p.17. (邦訳、40頁。)
- 4 *Ibid.*, p.19. (邦訳、43頁。)
- 5 *Ibid.*, p.36. (邦訳、86頁。)
- 6 *Ibid.*, pp.203-204. (邦訳、452頁。) ただし、創造し再記述するための哲学的権威となる伝統が、他に残されていないという消極的意味ではある。
- 7 *Ibid.*, p.6. (邦訳、16頁。)
- 8 *Ibid.*, p.74. (邦訳、164-165頁。)
- 9 *Ibid.*, pp.87-89. (邦訳、191-192頁。)
- 10 Louis Menand, *The Metaphysical Club*, Farrar, Straus & Giroux, 2002, pp.341-342. (野口良平・那須耕介・石井素子 訳『メタフィジカル・クラブ 米国100年の精神史』みすず書房、2011年、340-341頁。)
- 11 *Ibid.*, p.362. (邦訳、362頁。)
- 12 J. Dewey, *Experience and Nature*, *The Later Works vol.1*, Southern Illinois University Press, 1988, pp.312-313.
- 13 Louis Menand, *The Metaphysical Club*, p.433. (邦訳、434頁。)
- 14 Cheryl Misak, *The American Pragmatists*, Oxford University Press, 2015, p.x.
メナンドによれば、「この『メタフィジカル・クラブ』については、パース以外のメンバーはだれ一人として、どのような場所においても、一書簡、日記、公刊もしくは未刊行の文書などにおいても、これまで言及してこなかった。パース自身の記憶も35年を経たもの」と述べている。(*The Metaphysical Club*, p.201. 邦訳、201頁。) クラブの具体的な議論の詳細はわかっていない。
- 15 *Ibid.*, pp.1-2.
- 16 ミサックはパースの真理の収束説に関して、探究の終結を、長期にわたる将来の探究の吟味にも耐え続けているものとして考えている。なお、パースの真理の収束説については、石田正人らによっても精力的に研究が進められている。(「C・S・パースの真理の収束説」『科学哲学』45-1、2012年、47-63頁。)
- 17 *Ibid.*, p.107.
- 18 *Ibid.*, p.109. 『論理学理論の研究』(*Studies in Logical Theory*, 1903) を、ジェイムズはシカゴ学派の誕生と評価したがパースは認めなかった。上山春平によると、パースが論理学を規範科学と捉えたのに対して、デューイが「思想のナチュラルヒストリー」という記述科学として捉えたところに、妥協できない対立があった。(『上山春平著作集 第一巻』法蔵館、1996年、134-134頁。)
- 19 *Ibid.*, p.118. ()内は論者による。
- 20 ミサックによるパース、ジェイムズ、デューイ解釈の検討については、加賀裕郎「ミザクのプラグマティズム思想史解釈の批判的検討」(『同志社女子大学 総合文化研究所紀要』第31巻、2014年、

- 33-57頁)に詳しい。
- 21 伊藤邦武著『プラグマティズム入門』ちくま新書、2016年、88-89頁。
- 22 R. Rorty, “Introduction”, *The Linguistic Turn*, edited by R.Rorty, The University of Chicago Press, 1992, p.3.
- 23 R. J. Bernstein, *The Pragmatic Turn*, Polity Press, 2016, pp.126-127. バーンシュタインは註で、ブランドム (Robert Brandom) の著書のインデックスに経験のことばがなく、経験概念の哲学的重要性を理解することに失敗したこと、そしてジェイ (Malcolm Jay) によるローティに対する同様の批判を添えることで自身の主張を援護する。(Ibid., p.232.)
- 24 R. Rorty, *Consequences of Pragmatism*, University of Minnesota Press, 2008, pp.80-81. (室井尚、吉岡洋、加藤哲弘、浜日出夫、疋茂訳『プラグマティズムの帰結』ちくま学芸文庫、2014年、268-272頁。)
- 25 R. J. Bernstein, *The Pragmatic Turn*, p.128.
- 26 W. V. O. Quine, “Dogmas of Two in Experiment”, *From a Logical Point of View:9 Logico-Philosophical Essays*, Harvard University Press, 1980, pp.20-46. (飯田隆訳「経験主義の二つのドグマ」『論理的観点から』勁草書房、2001年、31-70頁。)
- 27 W. Sellars “Empiricism and the Philosophy of Mind”, *Science, Perception and Reality*, Routledge & Kegan Paul, 1971, pp.127-128. (神野慧一郎・土屋純一・中才敏郎訳『経験論と心の哲学』勁草書房、2006年、121-124頁。)
- 28 Ibid., p.170. (邦訳、211頁。)
- 29 J. McDowell, *Mind and World*, Harvard University Press, 1996, p.xvi. (神崎繁・河田健太郎・荒畑靖宏・村井忠康訳『心と世界』勁草書房、2012年、3頁。)
- 30 R. Rorty, *Consequences of Pragmatism*, p.161. (邦訳、445頁。)
- 31 R. J. Bernstein, *The Pragmatic Turn*, p.1.
- 32 Ibid., pp.128-129.
- 33 C. S. Peirce, *Collected Peirce of Charles Sanders Peirce, Vol.1*, edited by Charles Hartshorne and Paul Weiss, The Open Court Press, 1998, pp.148-179. (米盛裕二訳『現象学』パース著作集1、勁草書房、2017年、7-41頁。)
- 34 R. J. Bernstein, *The Pragmatic Turn*, pp.129-136.
- 35 Ibid., pp.136-144.
- 36 W. James, *Essays in Radical Empiricism*, Longmans, Green and Co., 1992, p.166. (梶田啓三郎、加藤茂訳『根本的経験論』白水社、1998年、142頁。)
- 37 Ibid., pp.5-9. (邦訳、18-21頁。)
- 38 W. James, *The Varieties of religious Experience*, Harvard University Press, 1985, p.34. (梶田啓三郎訳『宗教的経験の諸相』岩波文庫、2018年、52頁。)
- 39 R. J. Bernstein, *The Pragmatic Turn*, pp.144-150.
- 40 この“co-ordination”による内と外の関係の説明は、後のゲシュタルト心理学を先取りしたとして、心理学史上評価されているものである。J. Dewey, “The Reflex Arc Concept in Psychology”, *The Early Works vol.5*, Southern Illinois University Press, 1972.)
- 41 G. H. Mead, *Mind, Self, & Society: from the Standpoint of a Social Behaviorist*, ed. C. H.

- Morris, University of Chicago Press, 1967. (稲葉三千男、滝沢正樹、中野収訳「精神・自我・社会」『現代社会学体系』第10巻、青木書店、1973年。)
- 42 R. J. Bernstein, *The Pragmatic Turn*, pp.151-152.
- 43 J. Dewey, *Democracy and Education, The Middle Works vol.9*, Southern Illinois University Press, 1980, p.341.
- 44 デューイ教育論については、拙稿『デューイの<教材>開発論とその思想』（風間書房、2010年）を参照されたい。
- 45 C. S. Peirce, *Collected Peirce of Charles Sanders Peirce, vol.1*, p.50.
- 46 W. James, *Essays in Radical Empiricism*, Longmans, pp.278-279. (邦訳、227-228頁。)
- 47 R. Rorty, *Consequences of Pragmatism*, p.165. (邦訳、445頁。)

本稿は、第61回 日本デューイ学会研究大会(2017年)で口頭発表した原稿を、改訂したものである。